

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界

益気の八十橋

天まで届く岩の段

おりゅう柳

柳の精との悲しい恋

伝説

益気の八十橋

天まで届く岩の段

おりゅう柳

柳の精との悲しい恋

紀行

岩と樹木

- ・ 岩石信仰
- ・ 峰相山の亀岩
- ・ 檀特山頂の岩
- ・ 「おりゅう柳」伝説

関連情報

用語解説

参考書籍

所在地リスト

伝説

益気の八十橋 天まで届く岩の段

加古川市平荘町池尻（かこがわしへいそうちょういけじり）に、升田山（ますだやま）と呼ばれる山があります。この山の東面には、「益気の八十橋（やけのやそはし）」と呼ばれる岩場があります。奈良時代には、このあたりは「益気の里」と呼ばれていたため、こうした名前がついているのです。

益気の八十橋は、下から見あげると、岩が階段のように連なっていて、まるで天に登っていく階段のように見えます。古代の人々はこの岩場を、たくさんの神々が天上と地上とを行き来する階段だと考えました。この話は、奈良時代の初めに編集された『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』という書物にのせられていて、つぎのように記されています。

益気の里には石の橋がある。むかしむかし、この橋は天まで届いていて、たくさんの人々が登ったり、降ったりして、天上と地上とを行ったり来たりしていた。それで、「たくさん」という意味の「八十（やそ）」を付けて、「八十橋」と言うのである。

なお、ここでは「八十橋」と書かれていますが、『播磨国風土記』のころは、階段のことも「橋」と呼んでいました。

（『郷土の民話』東播編をもとに作成）

伝説

おりゅう柳 柳の精との悲しい恋

むかしむかし、今の養父市高柳（やぶしたかやなぎ）の北の山に一本の大きな柳の木がありました。もう何百年もそこに立っているような、とても大きな木でした。

山の北側にある九鹿（くろく）には、おりゅうという近所でも評判のきれいな娘がいました。おりゅうは高柳の造り酒屋へつとめに通っていて、その行き帰り、いつも決まってこの大きな柳の下でひと休みをし、長い髪（かみ）をとかしなおしていたのでした。

ある日のこと、いつものように髪をとかしていたおりゅうは、ふと人の気配を感じて顔をあげました。そこには若い侍（さむらい）が立っていて、おりゅうにほほえみかけていました。その日から、二人はこの柳の下で毎日出会うようになりました。楽しげな二人の様子は、いつしか村の人々のうわさにもなっていました。

ところがそのころ、都で三十三間（さんじゅうさんげん）のお堂を建てるために、材木を諸国から集めるとのうわさが流れ、まもなく、この柳の大木を切り出すようにとの命令が届きました。その日から柳の大木は、風もないのに枝をふりみだし、ごうごうと大きな音をたてて鳴りひびくようになりました。

やがて、国の役所から大勢の人々が村に着き、柳の切り出しをはじめました。しかし、斧（おの）を入れたはずの切り口が、次の日になるといつの間にかふさがっていて、仕事は一向にはかどりません。おかしいと思った人々が、夜通し柳を見はっていると、切りくずがひとりでに飛んでいって、切り口をもと通りにうめてしまっていたことがわかりました。

そこで人々は、次の日から夜になる前に、切りくずを焼いてしまうようにしました。それから仕事ははかどり、とうとう数日後に柳は切りたおされました。それに合わせるように、おりゅうも体調をくずしていきました。

切りたおされた柳を都まで運ぶために、また大勢の人々がやってきて、柳を引きはじめました。しかし、いくら人数を増やして引いても、柳はびくとも動きませんでした。困った人々は村の長老に相談しました。すると長老は、「おりゅうを呼んでくれば、動くかもしれない。」と言いました。

呼ばれてやってきたおりゅうは、病みつかれた姿で、そっとやさしく柳の木はだをなでました。すると柳は静かに坂を降りをはじめました。おりゅうが毎日会っていた若い侍は、この大きな柳の精霊（せいれい）だったのです。

（『兵庫の伝説』第一集をもとに作成）

紀行 岩と樹木

岩石信仰

古来、日本人は岩を信仰する感覚を持っていた。全国各地で、山肌に露出した岩盤を信仰の対象としているところは数多い。県域でも、たとえば播磨一宮伊和神社は山自体がご神体である。こうした信仰の対象となっている岩盤を、一般的には「盤座（いわくら）」と呼んでいる。ここでは、そうした岩にまつわる話をいくつか紹介しよう。



益気の八十橋



岩盤

益気（やけ）の八十橋（やそはし）は、『播磨国風土記』で神々が天上と地上を行き交う階段であったと記されている岩場である。八十橋の加古川対岸には、「ひょうご伝説紀行 語り継がれる村・人・習俗」の「禊墓と加古川下流の風景」でも紹介した日岡山（ひおかやま）がある。

南北朝時代に著された『峰相記（みねあいき）』には、竜山（たつやま）の生石（おうしこ）の女神と高御位山（たかみくらやま）の男神は夫婦であったが、男神が日向からやってきた女神を見初めて通いつめるようになったため、嫉妬した女神は加古川の対岸の日岡山に移り住んだ、という伝説が載せられている。古代のこの地域の人々は、こうした神々が天上と地上を行き来すると考えていたのだろう。



中腹の祠



祠から見た日岡山



加古川市街地方面



髯崎の屏風岩

同じような話は、たつの市新宮町にある「髯崎（はしさき）の屏風岩（びょうぶいわ）」についても記されている。これは、『風土記』では「御橋山（みはしやま）」と呼ばれ、大汝命（おおなむちのみこと）が米俵を積んで橋を建てたので、御橋山と名付けた、との由来が記されている。

この屏風岩は、岩の割れ目に入り込んだマグマが冷えて固まった「岩脈（がんみゃく）」と呼ばれるもので、国の天然記念物にもなっている。ここでは流紋岩ガラス質軽石凝灰岩（りゅうもんがらがらすしつかるいしぎょうかいがん）の中に石英安山岩（せきえいあんざんがん）の岩脈が入り込んでいる。岩脈の部分が周辺の岩石より固いため、風雨に削り残されて露出してできあがったものである。

峰相山の亀岩

紀行文「姫山の地主神」でも紹介した『峰相記』の舞台となった峰相山にも、岩にまつわる伝説がある。山頂から西南にのびる尾根筋に「亀岩（かめいわ）」と呼ばれる巨岩がある。『峰相記』によれば、この岩には割れ目に水がたまっていて、崇神天皇（すじんてんのう）13年という大昔、この岩の上に香稻が4本生えた。朝廷はこの種子を全国に配るよう命じ、当時の香稻はすべてこの種子がもとになっている、という。そして、これをまつたのが、峰相山の鎮守の第一であった稲根明神（いなねみょうじん）である、とされている。なお、崇神天皇13年とは、『日本書紀』の記述を西暦にあてはめると紀元前85年になるが、あてにならない。

亀岩に登ると、たしかに岩の小さなくぼみに水がたまっていた。また、いくつかのくぼみにはスギがしっかりと根を下ろしていた。岩の上には三角形の小さな岩がまつられている。『峰相記』には、当初はこの岩に稲根明神の社殿を建てたとされている。この記述を意識した誰かが置いたものであるだろうか。

稲根明神は、現在は稲荷神社として峰相山の南麓、姫路市石倉（いしくら）にまつられている。境内には鞍状の形をした岩である「石の鞍（くら）」がまつられており、「石倉」という地区名の由来となっている。こちらも岩石信仰である。

檀特山頂の岩

もうひとつだけ岩の話を紹介しておこう。太子町には檀特山（だんとくさん）という山があり、山頂にたくさんのかぼみがついた岩が露出している。登った人が必ず目をとめたであろうこの岩には、二通りの由来伝説がある。

ひとつは『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』のもので、岩上のかぼみは、大昔、応神天皇（おうじんてんのう）がこの山頂から国見（くにみ）をしたときの杖の跡であるとするものである。しかし、この伝説は中世に変容する。



石倉 稲荷神社



石ノ鞍



亀岩遠景



亀岩の上



亀岩から南を望む



檀特山頂の岩



南を望む



西を望む

中世になると、檀特山の西北側一帯は、奈良の法隆寺（ほうりゅうじ）の領地である鵜荘（いかるがのしょう）という荘園になっていた。鎌倉末期に描かれた鵜荘絵図（法隆寺蔵）では、この山頂に「黒小馬蹄跡（くるこうまひづめあと）」、「小馬縹松（こうまつなぎのまつ）」と記されている。「黒小馬」とは、一般的な聖徳太子（しょうとくたいし）伝説で、太子の乗馬として登場する「甲斐（かい=現在の山梨県）の黒駒」のことである。つまりこの絵図では、檀特山頂の岩のくぼみは、法隆寺を建立した聖徳太子が領地の視察をした際の、乗馬の蹄の跡ということになっているのである。

檀特山と聖徳太子の話は『峰相記』にも記されている。ここでは、鵜荘は聖徳太子が推古天皇（すいこてんのう）から与えられたものとされていて、現地を視察した聖徳太子が、荘園の四方に境界を示す石を埋め、檀特山に登って松に馬をつないだなどと記されている。

このように、檀特山頂の岩の由来は、奈良時代初めの『風土記』では応神天皇の杖跡と言われ、この地域が法隆寺の荘園となっていた中世になると、聖徳太子の乗馬の蹄跡とされるようになっていた。時代によって伝説が変化していくことが、確実な史料によって裏付けられる事例である。

このほか、檀特山の麓の矢田部には、聖徳太子の説法に感動して、ひとりでに転がり落ちたとされる岩がある。この岩は、「太子の感動岩」と呼ばれている。

さらに周辺の鵜荘域には、この山から聖徳太子が投げた（あるいは手のひらの上からはじいた）という「太子の投げ石（はじき石）」伝説が伝わっている。この話は、中世鵜荘の境界を示す「ぼう示石（ぼうじいし）」（ ）と結びつけて解釈されたこともあった。『峰相記』では、聖徳太子が四方の境界にぼう示石を埋めたと記され、鵜荘絵図では、境界上の主要な箇所にはぼう示石と見られる印が付けられている。中世のころ、荘域の境界を示す石が設置されていたことはたしかだ。

（ ）「ぼう示石」は、正しくは「榜示石」と表記しますが、インターネット上では正しく表示されない可能性があるため、ひらがなで表記しています。



矢田部の太子の感動岩



佐用岡平方の太子の投げ石



鵜北山根の太子の投げ石



林神東南の太子の投げ石社

しかし残念ながら、現在この地域で伝えられている「投げ石」は、そのほとんどが鵜荘の境界とは一致しない。どうやら中世のぼう示石と、現在の「太子の投げ石」は別のものようだ。ただし、両者はともに聖徳太子伝説と結びつけられている。

檀特山頂の岩の由来が、応神天皇から聖徳太子に代わっていった背景には、中世にこの付近が法隆寺の荘園となっていたことがある。法隆寺側の人物が、この荘園を上手に治めるために、聖徳太子の伝説を編み出し、地域に定着させていったと考えられるのである。

「投げ石」は動かすとなたりがある、と伝えられ、近年まで田んぼの真ん中やあぜ道などで人々に見守られて残されてきた。たしかに、「投げ石」の中には、奇妙な文様らしき刻み目があるものもあれば、田んぼの中にぽつりと立っているものもあって、何かいわくがあると思わせるものが多い。冒頭に記したように、日本人には岩を見ると信仰する気持ちを持っていた。そうした気持ちと、荘園領主である法隆寺がもたらした聖徳太子信仰とが結びついて、今日まで伝説として残されたのであろう。

「おりゅう柳」伝説

つぎに、樹木にまつわる伝説を紹介しよう。但馬に伝わる悲しい恋の物語が「おりゅう柳」伝説である。柳の巨木が立っていたというトガ山の「池の沢」、おりゅうが住んでいたという九鹿（くろく）、また勤めに通っていたという酒屋のある高柳など、伝説に登場する舞台の配置は、現地の実地の位置関係と矛盾なく理解できる。なお、話者によっては、おりゅうは高柳から九鹿の谷にあった提灯屋、もしくは酒屋に通っていたとする話も語られている。



池の沢 おりゅう柳跡

この地域でこの話が語られていたことを示す古い史料としては、享保12（1727）年の高柳高照寺の縁書がある。この『高照寺縁書』には、柳を見送った後のおりゅうに関する伝説も記されている。その後のおりゅうは髪をおろして尼僧（にそう）となり、各地を勧進（かんじん）してまわって橋を架けたといい、九鹿の谷をさかのぼった今井（いまい）にある橋がそれであるという。また、今井にまつられている観音菩薩は、信心が強く尼僧としての務めに励んだ、おりゅうその人の姿であるとされている。



高柳の集落と旧山陰道

おりゅう柳伝説は、但馬各地でも高柳周辺を舞台とした話として伝えられている。地域に深く根を下ろした伝説と言える。しかし、人間と恋仲になっていた柳の木が、三十三間堂の棟木として伐採されてしまうという、おりゅう柳とよく似た話は、北は宮城県から南は佐賀県まで、全国的に数多く見られることも指摘されている。ただし、全国的に見ると、柳の精霊が女性で、人間の男性と恋をするという話が多く、おりゅう柳とは、主役の男女が逆であるものが一般的である。



九鹿からトガ山を望む

これらの話は、江戸時代前半の古浄瑠璃（こじょうり）、『熊野権現開帳（くまのこんげんかいちょう）』がもとになっているとされている。『熊野権現開帳』はその後、宝暦10（1760）年大坂豊竹座初演の『祇園女御九重錦（ぎおんにようごこのえにしき）』へと改作されて現在に伝わっている。これらの浄瑠璃作品でも、柳の精霊が女性で、人間の男性と契りを交わす話となっている。

ところで、この浄瑠璃をめぐる比較的多くの研究があり、その源流については、鎌倉後期の公家日記の中に書かれていた説話までさかのぼることが明らかになっている。



九鹿の集落

その説話とは、三十三間堂を建立した後白河法皇（ごしらかわほうおう）が、熊野本宮（くまのほんぐう、和歌山県田辺市）に参詣した際、自らの前世は熊野本宮の僧侶蓮華房（れんげぼう）でありその遺骨が滝尻にある、との夢のお告げを受け、その通りに遺骨が見つかったので都に帰って三十三間堂を建立した、というものである。これが永享12（1440）年の仏教書『五重聞書』では、蓮華房の髑髏（どくろ）に柳が刺さっていた、という話に変わり、柳が登場するようになる。ここから江戸時代前半の『熊野権現開帳』へと展開していくとされている。

そして、『熊野権現開帳』以降に話の主題となっていく、柳の精霊と人間との結婚話にも、もとになった中国の古典があるという。中国元代（13世紀中ごろ～14世紀中ごろ）の歌劇である元雜劇（げんざつげき）の中に、『岳陽楼（がくようろう）』およびその改作である『城南柳（じょうなんやなぎ）』という2つの作品がある。そこには、柳などの樹木の精霊が人間となり、仙人の導きによって昇仙するまでが描かれていて、『熊野権現開帳』に見られる、柳の精霊と人間との結婚という筋書きは、これらの作品をもとに発展させたものではないかと指摘されているのである。

おりゅう柳は、おそらく地方回りの語り物の上演などを通して、江戸時代の中ごろから但馬養父に地域の伝説として定着していったのであろう。そして、この話を伝える古い史料が寺院縁起であるということは、物語のこの地域への定着に、地域の宗教者がかかわっていたことを示唆している。なお、この寺院縁起は享保12（1727）年のもので、『祇園女御九重錦』の初演（1760年）よりは古いので、話はそれ以前に但馬に伝わっていたことになる。

但馬のおりゅう柳伝説に登場する舞台は、現地の実際の状況と矛盾なく配置されており、『熊野権現開帳』や『祇園女御九重錦』などの中央の浄瑠璃作品と比べて、主役の男女が入れかわっている。主役の男女入れかえが但馬の独自性かどうかは、今後なお類話を収集するなどして検討していく必要があるが、いずれにしても、この伝説は、中央で創造された演劇作品に、地域の宗教者が若干のアレンジを加えることで、地域に定着するようになったものと見てよいだろう。

このように、おりゅう柳にも、ほかの伝説の中にも見られたように、全国的によく知られていた原話があった。よくできた話にはこうしたことも多いようだ。そして、紀行文「犬と人」の猿神退治伝説や犬寺伝説と同様に、その原話をたどっていくと、ついに中国までたどりついた。紀行文「河童」で紹介した河童は、遠くギリシャ神話とも共通性があるという。説話・伝説の世界は、しばしば海を越えて広がっていく。



今井の集落



今井橋



八柱神社境内の観音堂

用語解説

【『播磨国風土記』】はりまのくにふどき

律令国家（りつりょうこっか）の命令によって編纂された古代播磨の地理書。霊亀元（715）年前後に編纂されたものと見られている。現存するものは、三条西家（さんじょうにしけ）に所蔵されていた古写本で、巻首の赤石（明石＝あかし）郡の全部、賀古（加古＝かこ）郡冒頭の一部と、巻末の赤穂郡（あこうぐん）の全部の記載が欠落している。活字化されたものは、日本古典文学大系新装版『風土記』（秋本吉郎校注、岩波書店、1993年）のほか、全文を読み下した、東洋文庫145『風土記』（吉野裕訳、平凡社、1969年）などがある。

【流紋岩】りゅうもんがん

火成岩のうち、マグマが急激に冷えて固まった火山岩の一種。成分のうち二酸化ケイ素が70パーセント以上のものをいう。

【軽石凝灰岩】かるいしぎょうかいがん

凝灰岩とは、火山灰が堆積してできた岩石。そのうち、軽石を主な構成物質とするものを軽石凝灰岩と呼ぶ。そのもとになる成分は、流紋岩質か安山岩質となる。

【石英安山岩】せきえいあんざんがん

火成岩のうち、マグマが急激に冷えて固まった火山岩の一種。二酸化ケイ素が63～70パーセントのもので、「デイサイト」ともいう。

【『峰相記』】みねあいき

峰相山鶏足寺（みねあいさんけいそくじ＝現在の姫路市石倉の峰相山山頂付近にあった寺）の僧侶が著した中世播磨の宗教・地理・歴史を記した書物。原本は本文冒頭の記述から貞和4（1348）年ごろに成立したと考えられる。現存する最善本は揖保郡太子町（いぼぐんたいしちょう）の斑鳩寺（いかるがでら）に伝わる写本で、奥書から永正8（1511）年2月7日に書写山別院（しょしゃざんべついでん）の定願寺（じょうがんじ）で写されたものであることがわかる。活字化されたものは、『兵庫県史』史料編中世4（兵庫県史編集専門委員会、1989年）や、全文口語訳をした、西川卓男『口語訳『峰相記』 中世の播磨を読む』（播磨学研究所、2002年）などがある。

【崇神天皇】すじんてんのう

『古事記』・『日本書紀』の神話では第10代の天皇とされる。実在の可能性が指摘されている最も古い代の天皇でもある。

用語解説

【応神天皇】おうじんてんのう

『古事記(こじき)』・『日本書紀(にほんしょき)』の神話では第15代の天皇とされる。母の神功皇后(じんぐうこうごう)が朝鮮半島に出兵したときは、母の胎内にあり、帰国後筑紫(つくし=現在の福岡県付近)で生まれたと記される。また、朝鮮半島からの論語(ろんご)・千字文(せんじもん)の伝来なども応神代の記事として見える。

実在の可能性を考える説もある天皇で、河内(かわち=現在の大阪府東部)を拠点とする新王朝の創始者とする説や、4世紀から5世紀に中国へ使者を送ったと中国の歴史書に見える、いわゆる「倭の五王(わのごおう)」の一人に比定する説などもある。日本最大級の古墳の一つである大阪府羽曳野市(はびきのし)の誉田御廟山古墳(こんだごびょうやまこふん)が、古来その陵墓とされてきた。また、後世には父仲哀天皇(ちゅうあいてんのう)、母神功皇后とともに、八幡信仰の三祭神の一つともされるようになっている。

【聖徳太子】しょうとくたいし

574 - 622。推古天皇(すいこてんのう)の摂政(せつしょう)・皇太子。本名は厩戸王(うまやどのおう)。仏教への信仰が厚く、四天王寺(してんのうじ)や法隆寺(ほうりゅうじ)を建立したほか、経典の注釈書も著したとされる。また、冠位十二階(かんいじゅうにかい)や十七条の憲法を制定するなど、摂政として政治改革にも努めたとされる。ただし、こうした国政上での活躍は、奈良時代における創作である、などとする説もある。

聖徳太子をめぐるのは没後、さまざまな伝説が語られるようになった。平安時代中ごろ成立の『聖徳太子伝暦(しょうとくたいしでんりゃく)』は、そのころまでにできあがっていた諸伝説を集成したもので、以後の聖徳太子信仰の展開に大きな影響を与えた。

【古浄瑠璃】こじょうるり

浄瑠璃の成立は、15世紀後半のころと見られているが、当初は、今日のような人形芝居を伴わない、伴奏にのせた語り物の形をとっていた。その後、17世紀後半に竹本義太夫(たけもとぎだゆう)が義太夫節と呼ばれる曲風を創造して人気を博す。この義太夫節から今日に伝わる人形芝居を伴う浄瑠璃が発達していった。古浄瑠璃とは、こうした義太夫節成立以前の段階の浄瑠璃を指す。

【三十三間堂】さんじゅうさんげんどう

京都市東山区にある仏堂で、正式には蓮華王院(れんげおういん)本堂と呼ぶ。蓮華王院は、長寛2(1164)年に後白河上皇(ごしらかわじょうこう)が、平清盛(たいらのきよもり)に命じて、自身の離宮である法住寺殿内に造営した寺院。鳥羽上皇(とばじょうこう)が清盛の父平忠盛に造営させた得長寿院(とくちょうじゅういん)にならって、三十三間の細長い堂に、1,001体の観音像が安置された。なお、後白河が造営した蓮華王院は、建長元(1249)年の火災で焼失し、現在の堂は文永3(1266)年に再建されたものである。

用語解説

【後白河法皇】ごしらかわほうおう

1127 92。鳥羽上皇（とばじょうこう）の第4皇子で、若い頃は「今様（いまよう、当時の流行歌）」に凝るなど芸能を好み、周囲からは天皇の位を継ぐ器とは見られていなかったという。しかし、近衛天皇（このえてんのう）の死去にともない、崇徳上皇（すとくじょうこう）の皇子の即位を望まない鳥羽上皇の意向もあって久寿2（1155）年に天皇となる。ついで、保元3（1158）年に皇子の二条天皇（にじょうてんのう）に譲位して上皇となり院政を行った。

治世中は、保元の乱（1156年）、平治の乱（1159年）、その後の二条天皇との対立、続く平清盛（たいらのきよもり）の勢力拡大、源平が戦った治承（じしょう）・寿永（じゅえい）の内乱と鎌倉幕府の成立に至るまで、数多くの戦乱とめまぐるしい政治の変動が起こる動乱の時期であった。後白河はこの中で次々と現れてくる新勢力と対決、妥協をしつつ、数々の危機に瀕しながらも、最終的には院政・公家政権の一定の維持に成功した。建久3（1192）年3月没。

【熊野本宮】くまのほんぐう

和歌山県田辺市にある神社。現在の正式名称は熊野本宮大社。同県新宮市（しんぐうし）にある熊野速玉大社（熊野新宮）、同県那智勝浦町（なちかつうらちょう）にある熊野那智大社と合わせて、「熊野三山」と呼ばれ、古くから信仰されてきた。とくに平安後期の院政期には、院をはじめとする多くの貴族が参詣を繰り返すようになり、これ以後、熊野参詣は次第に社会の諸階層に広まっていった。

【元曲】げんきょく

中国元代（13 14世紀）に盛んになった雑劇、歌謡の総称。他の時代に比べてこのジャンルで優れた作品が多く、元代の文学を代表するものとして評価を受けている。

参考書籍

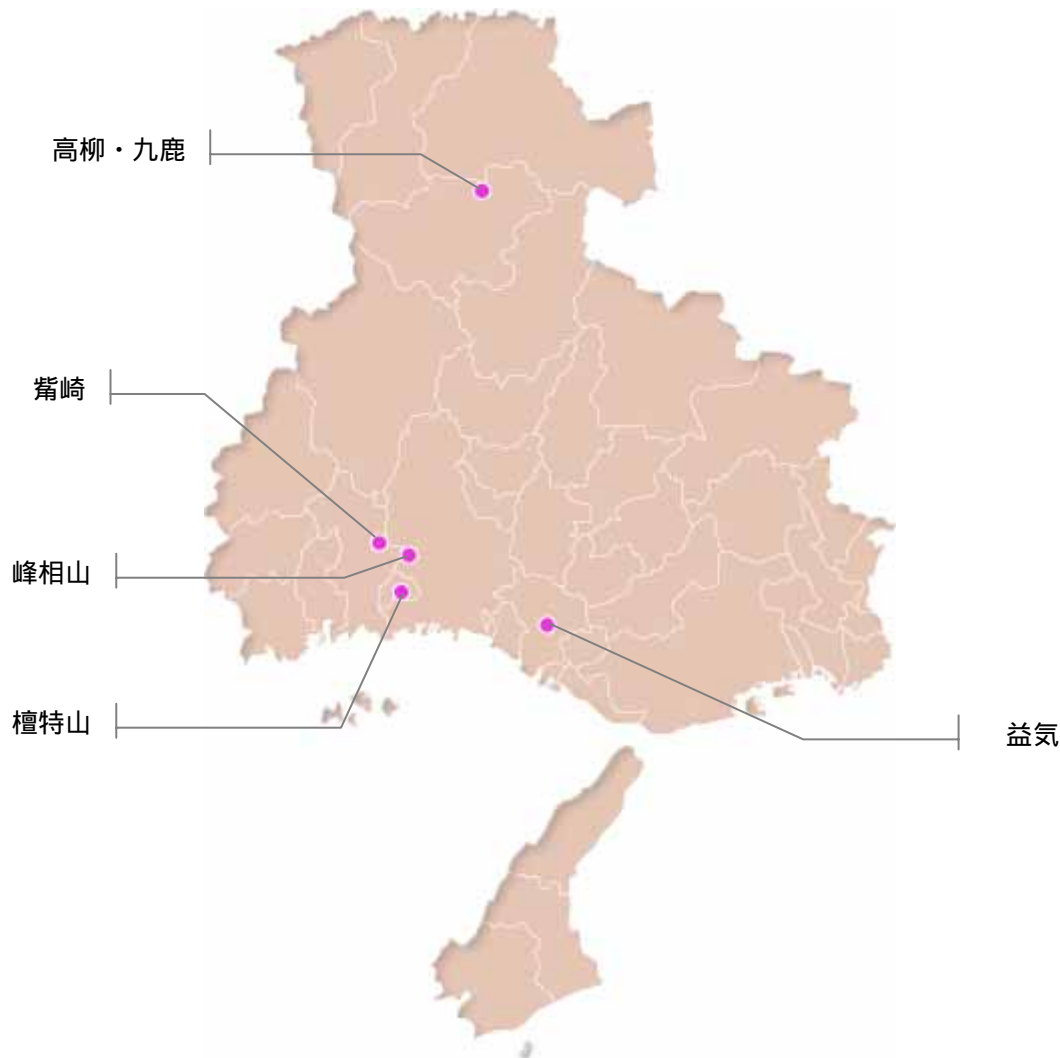
伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
日本伝説 播磨の巻	1918 1978復刻)	編著:藤沢衛彦	日本伝説叢書刊行会
兵庫の民話(日本の民話 25)	1960	編集:宮崎修二郎、徳山静子	未来社
郷土の民話 東播編	1972	編集:"郷土の民話"東播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
兵庫の伝説	1980	編著:兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
兵庫の伝説 1	1981	編集:有井基、絵:のざきジョー	神文書院
八鹿のむかし話	1982	編集:ふるさと文庫編集委員会	八鹿町
兵庫のむかし話釈講	1983	著:船知慧、さしえ:森崎伯霊	中央出版エージェント
日本伝説大系 8 北近畿編	1988	編集:福田晃	みずうみ書房
伝承八鹿	1992	編集:八鹿町老人会連合会	八鹿町老人会連合会
但馬八鹿町の民話と唄・遊び	1996	編著:稲田浩二、鶴野祐介	手帳舎

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
播磨国風土記(収録:日本古典文学大系新装版『風土記』)	1993	校注:秋本吉郎	岩波書店
峰相記(収録:『兵庫県史』史料編中世4)	1989	編集:兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
播州府中記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州八十岩橋記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
祇園女御九重錦(収録:叢書江戸文庫37『豊竹座浄瑠璃集』3)	1995	校訂:伊藤馨	国書刊行会
播磨鑑	1958	著者:平野庸修、校訂:播磨史籍刊行会	播磨史籍刊行会
播州名所巡覧図絵	1974	著者:秦石田、校訂:井口洋	柳原書店
増訂 印南郡誌 前後編	1916 (1973復刻)	編纂:兵庫県印南郡役所	兵庫県印南郡役所(復刻:名著出版)
伝説の兵庫県	1961 (2000再刊)	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター(再刊)
八鹿町の文化財	1969	編集:八鹿町公民館	八鹿町公民館
八鹿町史 上	1971	編集代表:中島喜市	八鹿町役場
播磨伝説風土記	1976	編集:読売新聞社姫路支局	姫路駟路の会
聖徳太子の榜示石	1976	谷岡武雄	学生社
日本物語通観 16 兵庫	1978	責任編集:稲田浩二、小沢俊夫	同朋舎
日本伝説大系 3 南奥羽・越後編	1982	編集:野村純一	みずうみ書房
日本伝説大系 9 南近畿編	1984	編集:渡邊昭五	みずうみ書房
唱導と王権 得長寿院供養説話をめぐりて(収録:水原一編『伝承の古層』)	1991	阿部泰郎	桜楓社
木霊婚姻譚 その成立背景(収録:『梅花日文論叢』3号)	1995	前田久子	梅花女子大学大学院日本文学会
「鵜荘(ぼう)示石」についての覚書(収録:大山喬平教授退官記念会編『日本社会の史的構造』古代・中世)	1997	小林基伸	思文閣出版
熊野の髑髏と柳 三十三間堂創建説話群について(収録:『国文学 解釈と教材の研究』44-8号)	1999	中前正志	学燈社
播磨 山の地名を歩く	2001	編集:播磨地名研究会	ひめしん文化会、神戸新聞総合出版センター
フィールドガイドブック 新宮町の自然	2001	編集:新宮町自然調査団	新宮町教育委員会
「卅三間堂棟由来」(「祇園女御九重錦」)の構想と文政期以後の上演(収録:『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第3分冊、52号)	2007	内山美樹子	早稲田大学大学院文学研究科

所在地リスト



高柳・九鹿	養父市八鹿町高柳、九鹿、ほか
紫崎	たつの市新宮町紫崎
峰相山	姫路市石倉
檀特山	太子町矢田部、ほか
益気	加古川市東神吉町升田

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日